非行少年の社会的予後に関する研究（総括）*

東京都品川児童相談所

水 島 恵 一**

I 要結と考察

前2回(19)において私は follow-up の結果にもとずき、非行少年の予後に影響する諸因子の発見とその吟味を行つて来た。いまその過程を要約すれば、まず113名の横浜少年鑑別所収容少年を実社会に出てから2年以上 follow-up した結果、再非行に陥るもののうち、その大部分は1年以内に再非行に陥ることが見出された。そこでこの結果にもとずき、横浜少年鑑別所で精密調査鑑別された200名の非行少年を、その後実社会に出てから1年間の成績によつて、良好群（再非行のないことが確認されたもの、及びほぼ確実とみられるもの）、不良群（再非行に陥つたもの）、その他の群（家出行方不明者、軽度のぐ犯生活者など）に分け、鑑別所在中所の調査・鑑別の結果測定された諸因子を、これらの群について比較することにより、どのような少年が更生しやすく、どのようなものが再非行に陥りやすいかを求めたのである。つまり予後Bを $B = f(P, E)$ と表わせば、このうちEに当る処遇環境因子は考慮の外におき、 $B = \varphi(P)$ の関係を考察しようとしたわけである。

調査された因子は、まず、非行初発年令、非行歴の長さ、鑑別所・少年院経験、学校時代の不良交友・怠学経験、最終学歴、学校での虐待、家出・浮浪経験、覚せい剤使用経験、転退職頻数、非行名、非行形態であり、これらを人格規定因子とみることは大体において問題あるまい（後述）。次に同じ客観的調査による因子として、家庭状態、家庭欠損の時期、同胞数、同胞間での位置、近隣・家庭・職場の不良ふんいき、居住地、家庭内不満、徒遊集団所属の各因子が測定されたが、これらは処遇環境規定因子として予後に作用しているとみられた場合は、本論からは除外した（後述）。以上が本研究の中軸をなす因子であるが、このような主として社会調査によ

つて測定しうる因子を選んだのは、それが比較的客観性をもっており、また従来行われている心理テストなどよりは、より効果的に非行性を把握しようと考えたからに他ならない。事実、Table 1の左端に掲げたように、これらの因子は、私が用いた若干の心理テスト（知能、クレペリン、向性）の成績よりも、一層適切に予後を予測しているのである。もちろんここに掲げた心理テストが適当なものでなかつたのではないかという疑問は起る。

TAT, Rorschach などの代表的投影法や、mosaic 法などの行動観察法の成績と予後との関係は、今後の問題として残されているわけであるが、しかしこれらのテストは、何れも非行性それ自体の測定をめざしているのではない以上、EEG, GSRなどの特殊な測定の場合と同様、非行者のある特殊なものを抽出し、部分的に興味ある予後との関係を示す可能性はあるとはいえ、一般的な予後予測因子を導くものとしては、自ら限界があるのではなからうか。（Rorschach については例えばGlueck(8)の研究を参照。またEEGにおいては、ごく少数の異常者だけが抽出され、その少数のものについては、かなり効果的に予後不良という結果が導かれるものと推定できる。）一方、了解的（主観的）判定因子についてであるが、この判定は通常生活史調査や行動記録を通じて為されるので、上述した外的諸因子の総合と本質的には異なるものでなく、更に判定者の主観が混入するという弱点をもっているので、本研究では重きを置かなかつたのである。しかし外的因子は、精神分析学派(1)(7)をはじめHealy(14), Tappan(28)などによつて強調されているように、あくまで非行に直接関係するところの「人格にとり入れられたもの」ではない。つまりここではこの人格にとり入れられた非行性を客観的に測定しようとする立前からの外的因子に重きをおいたのであるが、少なくとも個別的にみる限り、それらの負因をいかに多く背負つていても非行性が強いとはいえないような例外もあるわけである。従つて現段階では、間接的、了解的判定の役割を無視できないわけである。専断私がこの点を捕足するために、操作的方法をとり入れた了解判定によつて測定し

* A Study on the Prognoses of Social Adjustment of the Delinquent Juveniles — Conclusion —

** By Mizushima, Keiichi (Tokyo Child Guidance Clinics)

た、反社会的傾向（不良目的性）、弛緩的傾向、即行的傾向、及び被影響性、自己中心性、忍耐力障害度の6因子は、被影響性を除いては何れも強く予後との関係を示しているのである。これらの6因子は、もちろん私が自分自身の経験から、非行の深度及び型を決定する重要なものであるとみなした特性であり、基底的には意志欠除、情性欠除、自己顕示という、非行に最も縁の深いものを捉え、心因現象的には、やはり非行と最も縁の深い攻撃、退行、不良目的性の諸相を捉えたものである。しかしながら本研究の目的が、単に効果的な予後予測をするということだけでなく、「どのような少年が更生しやすいか」という一般的探究にある以上、一般的な性格特徴、精神病質特徴をも測定し、予後との関係を吟味することが望ましかつたといわなければならない。（この点について私は別に100例について、Schneider(26)の分類によつて捉えた精神病質諸特徴と予後との関係を研究し、その結果、意志欠除、爆発、情性欠除、自己顕示などについて顕著な関係をえたのであるが、その詳細は別の機会に報告したい。）

ところでもう一つ吟味すべき点が残っている。前述したように、非行を理解するのに重要なものは、例えば「非行歴の長さ」というような外的因子ではなく、それが人格にとり入れられた、例えば「不良目的性」というものである。しかし更に考えれば、このように「全く人格にとり入れられたもの」としての因子のみが重要であるのか、いや、そもそもそういうものが存在するののかということは疑いなしとしない。この点に関して私は別に、測定された因子が果してP（処遇前人格）を表すものなのかE（処遇環境）を表すものなのかという判断は、すべて程度の問題であるということをおいた。我々は例えば家庭に不良ふんいきを持ったものの予後が悪いことを、まず「不良ふんいきのある家庭にその後も生活したために」予後が悪くなったとみて、これを処遇環境規定因子と考えたのであるが、しかし同時にそれは不良家庭に育つたために道徳性の歪みその他の欠陥をもっているから」予後が悪いのだという人格規定因子としても考えられたのである。同様なことは例えば我々が純粋に人格規定因子として扱った「義務教育非終了」というようなことにもいえるわけで、「義務教育非終了者は貧困家庭に多く、従つて処遇環境も貧困であるが故に予後が悪いという処遇環境規定因子としても考えられないことはないのである。従つてどの因子をとつてみても、それが厳密にP又はEの一方のみを表わすとは考え難く、しかもそれは今のべたように操作的にそうであるのみならず、本質的にそうなのである。「徒遊集団所属」

「家庭不満」という2因子は、この点のあいまいな典型であるが、前者についていうならば、それは今のべたように、一般的不良交友性という点から考えれば、どんな環境のもとでも不良交友を行う因をなすのであるから、Pを規定するものだということができ、家に帰つてからの処遇環境においても近所に自分を誘うグループがあるという点から考えれば、Eを表すことになる。ところが一般的不良交友性があつても、もし全く不良仲間と接することができないという閉鎖的環境におかれたならば不良交友は起らないだろうし、また後者のように考えた場合も、もしその具体的なグループとの地理的・心理的な隔離が現実に困難な場合は、それは例えば「攻撃性」というようなものと同じく、半固定的に本人にまつわりついたものと考えざるをえないのである。もともとPersonality というものが、社会・環境と切り離して考えることのできないものであつてみれば、このことは当然であろう。こうして我々は、現実に変化、調整の可能性の大きい環境に依存しているもののみをEとしてとらえ、その他は一応Pとみなして考えるべきだという相対論に落着いたのである。そこで論をもとにもどして、このような観点に立つならば、我々は始めから、環境から比較的抽象された人格規定因子を求めるのみでなく、HealyとBronner(14)が行つたように、人格と環境との関係の仕方を規定する因子をも広く求めるべきではなかつたかということになるわけである。もしも非行を病気にたとえるならば、個々の非行は症状であり、環境から抽象されたPersonalityは、病気にかけやすい体質に相当するもので、病気それ自体は「人格と環境との関係の異常状態である(20)。」従つてこの病気それ自体と予後との関係をも広く求めることが必要だつたと思われる。この点については「非行の社会心理学的診断型」を一つの総合的因子として測定しておいたので、後述することにした。

さて以上、人格規定因子として、上述のほかに身長、体重、年令の3因子を加えて、合計40の因子について検討し、Table 1の左端にあげたような予後と関係ある26の因子（このほか主として処遇環境を規定するとして除いたものが、職場の不良ふんいき、同胞数の2因子）を見出したのであるが、これらの因子は相互に独立のものではない。例えば非行初発年令と非行歴の長さとは深い関係があるので、「早期非行初発者の予後が悪いのは、彼等の非行歴が長いためである」のかもしれないし、その逆のことがいえるのかもしれないわけである。そこで関係ありと思われる二つの因子について、一方の因子の良・不良群における分布を等しくした上で他方の因子の

Table 1 総括

$(\sqrt{\frac{X^2}{N+X^2}})$	予後を悪くする因子	包括関係	吟味して残った包括的因子
(.56)	低い初発年齢 (first delinquency at low age)		長い非行歴 long delinquent history
(.52)	長い非行歴 (long delinquent history)		
(.30)	鑑別所入所経験 (past confinement into Juvenile Classification Office)		
(.32)	少年院入院経験 (past confinement into reformatory)		
(—)	単独・共同の双方での犯罪 (offense both 'lone' and co-operated)		怠学経験 experience of truancy
(.43)	学校不良交友 (played gang at school)		
(.51)	怠学経験 (experience of truancy)		(高校非入学) (not entered in high school)
(.27)	低い学歴、特に中退 (low education)		
(.40)	家出経験 (experience of running away)		家出浮浪 running away and wandering
(.37)	浮浪経験 (experience of wandering)		
(.41)	家庭不満 (home conflict)		頻回転退職 frequent change of employment
(.69)	頻回転退職 (frequent change of employment)		
(.22)	覚せい剤使用 (stimulant addiction)		(徒遊集団内覚せい剤使用) (stimulant addiction in group)
(.35)	徒遊集団所属 (association with gang)		
(—)	家庭の不良ふんいき (vicious home)		徒遊集団所属 association with gang
(.54)	反社会傾向：不良目的性 (antisociality: bad intention)		
(.44)	弛緩的傾向 (defect of motive power)		反社会性：不良目的性 antisociality: bad intention
(.44)	即行的傾向 (defect of inhibition)		
(.23)	被影響性 (defect of independenc)		
(.40)	忍耐力障害 (defect of frustration tolerance)		意志薄弱 antisociality: defect of will
(.47)	自己中心性 (selfishness)		
(.32)	クレペリン後初欠除 (Kraepelin's Curve —defect of initial spurt)		クレペリン異常・劣等型 abnormality of Kraepelin's work
(.34)	休憩効果欠除 (—defect of rest-effect)		
(.27)	落込み (—defect of smoothness)		(クレペリンC以下の低いIQ) (low IQ with low Kraepelin's work)
(.37)	作業量C以下 (—low quantity, C or less)		
(.24)	低いIQ (low IQ)		

両群における差を検定するという方法で、因子間の包括関係を吟味したところ、かなりの因子統一がなされ (Table 1 実線)、Table 1 の右端に示した因子のみが、独立に予後との関係を示す因子として残されたのである。例えば早期非行初発者の予後が悪いということは、彼等の非行歴が長いからということではほとんど説明され、少くとも早期非行初発それ自体に問題があるとはいきれなくなるのである。このほか、より包括的な新しいスケールを設定することによって因子統一がなされたものもある (Table 1 の点線)。こうして Table 1 の右端にえられた 11 のものが、本研究の結果えられた、それ自体予後を規定する因子だということになるわけである。(それ以外のものも、それ自体では予後と関係しないというわけではなく、それ自体では予後と関係するといきれないだけのものであることに注意を要する。)

もちろんこの最後に残った 11 の因子も、相互に独立のものではない。のみならず、より包括的なものを求めた結果、これらは因子分析によつて抽出されるものとは全く逆に、素数的なもの (本来のいみでの因子) からはより遠ざかつており、従つて相互に高い相関をもっているわけである (Table 2 を参照)。従つてこれらの因子に心理学的解釈を与えるにしても、それは推測的なものにとどまらざるをえまいし、また後にのべる予測表の作製においては、改めて相関関係の吟味をせねばならないわけである。しかし因子分析のような手段を始から用いたとしても、結果の解釈はやはり推測的になるし、更に分析の結果えられた因子を予後と関係づける場合も、極めて煩雑にならざるをえないであろう。この点については、なお次節で検討したい。

さてこれらの因子のいみを探ってみよう。まず長い非

Table 2 相関関係 (近似値)

	1	2	3	4	5
1 非行歴の長さ		.41	.32	.36	.29
2 怠学経験	.41		.44	.28	.43
3 転退職頻数	.32	.44		.25	.12
4 家出浮浪	.36	.28	.25		.10
5 徒遊集団所属	.29	.43	.12	.10	

行歴から徒遊集団所属までの7因子は、外面的因子であり、また本調査が外面的因子に主眼をおいたものであるだけに、それは外面的因子の代表的なものであるとみなしてさしつかえあるまい。つまりもし非行少年を外面に現れた行動歴のみから判定しようとするならば、この7因子に主として注目することが妥当だといえるのである。いまこれら7因子のうち、包括的な5因子の相関関係を近似値で求めてみると、Table 2のようになる。これを基礎にして因子の吟味をするに、まず長い非行歴は、非行性の最大要素である不良習性、不良目的性などを主として表現しているとみられる。これに対して頻回転退職は、おそらくは主として人格の奥深く根ざした不適応性を表現しているのではあるまいか。非行歴の長さが主として積極的非行性を表しているのに対し、頻回転退職は消極的非行性を主として表現しているといつてもよからう。そして怠学経験は(上記両因子と高い相関にあるゆえ)主としてこれらの両要素をいくらかづつ、しかも異った面において規定しているものと考えられるのである。もちろん前述したような「外面的因子に必然的に伴う制約」は、特に転退職については考えなければならない。正常な人格の頻回転退職は、現在の世相のもとでは十分に多い。しかしそれにもかかわらず、統計的にみるときは、この因子は人格の不適応性を明白に示しているのである。次に家出浮浪及び徒遊集団所属は、それぞれ非行の根底をなす病的心的機軸の二大群、つまり不満状態及び不良感染状態が十分に危険な程度に高まり、それぞれ危険な傾向として人格にもとり入れられている状態を主として表現しているものと解釈できよう。(20) (単なる家庭不満でなく、家出浮浪という形でより包括的に規定されているのであるから、不満状態が危険な傾向を形成したときに、予後に一層影響するのだと考えるべきである。) 最後に、残された「高校非入学」及び「徒遊集団所属者の覚せい剤使用」についてであるが、この両者の予後規定度はぐつと低くなり、もしも更に広く因子を求めるならば、この程度の因子は他にも見出せるだろうと思われる。つまりこの2因子は既に代表的因子ではなく、非行を modify する多くの小さな因子の中の一つ

であると考えの方が妥当であろう。

以上の外面的因子に対して、内的判定因子である反社会的傾向、即行的傾向、弛緩の傾向は、それ自体一層非行性を形成する素数的なものを表しているといえることができる。つまり反社会的傾向は積極的非行性を、即行、弛緩傾向は消極的非行性を示していることは疑いないところであろう。もちろんこれらは夫々に対応する外面的因子と十分な相関を示さず、また互いに包括関係も認められなかつたわけであるが、これはむしろ外面的因子のもつ制約のためであつたと解した方が妥当であろう。そして外面的諸因子を組合せた場合に始めて、当然に、内的諸因子を組合せた場合と同じようなものを表現しうるとみることができるのである。

最後にクレベリン曲線型と予後との関係はいかなるいみをもつものであるか、これだけでは判定し難い。しかしおそらく、上述して来た諸要因のいくつかのものを、少しづつ表現している程度のものであろう。更に外面的因子、内的判定因子の抽出のされ方に比べて、このクレベリン曲線型の抽出は根本的に異つている。前二者はかなりの程度総合的に諸因子を検討した結果抽出されたものであり、従つて一応代表的因子としてのいみをもつものであるが、後者についていえば、心理テストはごく少数しか行つていないので、決してクレベリン曲線のみが抽出されたわけではなく、従つてテストの代表としてのいみも、もちろん持合せていないのである。従つてクレベリン曲線については、特にとりあげて問題にすることは危険が大きい。ただこのテストが予後のある程度示してくれるものだということにすぎないのである。

以上を要約すれば、我々は非行少年に接するとき、その非行性の積極面としての反社会的傾向(主として我執的攻撃性及び不良目的性をいみする)及び消極面としての即行、弛緩傾向(主として意志薄弱又は Aichhorn のいう反社会性格)に目を向けることが効果的であり、これを外面的にみるときは、非行歴の長さ及び怠学経験を主として前者の現れとし、頻回転退職及び怠学経験を主として後者の現れとしてそれぞれ重要視することが効果的だということになる。なお家出浮浪及び徒遊集団所属によつて主として表される、人格にとり入れられた傾向としての不満不適応及び不良感染の程度に目を向けることが大切だといふべきであろう。

附論： 最後に男女差について一言しておきたい。女子の例数は全体で30しかないで、ほとんど積極的結論は見出せない。女子の全体の傾向としては、家出の多いこと、IQの低いこと、単独非行の多いこと、その他当然の傾向として非行名に男子との差をみる程度で

あり、これらも予後との関係においては、男子に比して特筆すべき傾向を認めない。つまり以上にのべて来た諸結論は、男女双方に妥当することであるとみて差支えあるまい。女子には家出行方不明の予後を持つものが著しく多いが、これも女子の家出が多いということと軌を一にするものであり、更に赤線地区入りなどのために女子の再非行がしつこく追究されないという行政の問題を表現しているにすぎないとみられるのである。ただ一つだけ、(例数が少いので推定にとどまるが) 女子においては単独犯の方が共同犯よりも治りにくいようである。これは私が別に発表したところによると(21)、単独犯が女性本来の、Personality に問題をもつ非行形態であるに反して、共同犯はむしろ例外的に機会性のものとして Pick-up されたものであるため、機会性のものが治りやすく状態性のものが治りにくいという Exner (6) の理論を裏書きしたものであると考えてよからう。

II 予後予測の方法

まず内的判定因子による予後予測表は、既に前回(19)の Table 9 によつて与えられている。再度 Table 3 として掲載した。この予測表は簡単ではあるが効果的なものである。更に測定方法も単なる主観のみによつたものではなく、了解を基礎として一定の規準を設けて測定した結果えられたものである。従つて「非行性を形成するに最も重要とみられる心的機制を一定の規準によつて了解測定した結果は、外面的客観的因子を多く

Table 3 予後予測表
(人格型と予後)

		良	不良
正 常		7	0
準 正 常		16	11
意 志 薄 弱		6	12
反 社 会 性		5	8
反社会意薄性		0	38

(分類基準については前回を参照)

測定して統計的に処理した結果に劣らず効果的に予後を予測できる」というべきであろう。犯罪心理学の分野においては、客観性を失わない程度において、こうした了解的方法を更に汲み入れ、心的機制に目を向けて行くことが今後ますます必要とされるわけである。

しかしながら本研究の中心は、やはり外面的因子の研究におかれている。そこで上記と併行して、前節に最後に残された主要な因子、即ち非行歴の長さ、怠学経験、転退職頻数、家出浮浪、徒遊集団所属の5因子によつて従来の諸家によつて作られて来た形式の予後予測表を作製することは、本研究の一応の締めくくりであるとい

わなければなるまい。ところで従来の諸方法に多く現れがちであつた予測表作製上の主な欠点をあげてみると、因子間の相関を殺さずに用いるための危険及び効果の減退、無理に相関の低い因子のみによつて表を作るための効果の減退、因子に重みをつけないための危険及び効果の減退、重みのつけ方が理論的に納得の行く限度をこえるために当該 Sample においては効果的な表を作つても他の Sample に当てはまらないこと、因子を無選択に多くとりすぎたり、測定や統計の誤差以上に細かい重みづけをして無用に煩雑にしてしまうこと、などがあげられる。そこで私は前記5因子のみを用い、これらの相関を殺した上で重みづけを行つた結果、Table 4 に示したような近似式をえた。これによつて全体の合計点を出したものが各個人の難点であり、その難点によつて本研究の対象を分類したのが Table 5 である。(特に転退職頻数不明のことが多いので、例数は著しく少くなつてゐるが、転退職頻数の推定値がえられなくともその幅が分つていて分類に差支えないものは計上してある)。なお転退職に関する資料がえられないもの、特に未就職者については、転退職頻数を除いた4因子によつて予測表を作

Table 4 難点の算出法

非行歴の長さ	半年につき2を加算し、1年以上の分については半年につき1を加算する。4年以上は加算せず。
怠学経験	時折のものは2点、常習を6点とする。
転退職頻数	平均一職業持続月数を x とし、 $(6 - \frac{x}{4})$ を得点とする。但し $x \leq 3$ のときは更に $(4 - x)$ を加算する。
家出浮浪	無断外泊を2点、家出浮浪を6点とする。
徒遊集団所属	軽度のものを1点、本格的なものを5点とする。

註：転退職頻数測定不能の場合は、近似法として怠学常習を7点とし、合計点に5/4を乗ずる。

Table 5 予後予測表 (難点合計と予後)

難 点	良	不良	更生率
0 — 4	5	0	1.00
5 — 9	8	1	0.89
10 — 14	9	2	0.82
15 — 19	7	8	0.47
20 — 24	3	18	0.14
25 — 29	1	18	0.05
30 — 34	0	8	0.00

製するのがよく、この場合は始から表を作り直さねばならないわけであるが、近似的には Table 4 の注を用いて Table 5 を適用することもできる。但しこの場合は適中率は減退し、Table 5 の中央のカテゴリーを境として、両側の更生率を若干増減して考えなければならない。

もちろんこの予測表は、従来までに例えば Burgess(5), Schiedt(25), Glueck(9)(10), 吉益(29)~(31), 樋口(15), 天野(3)らによつて作製された予測表の一種であるにすぎない。これらの様々な予測表の統一を試みたり、或はそれらに優劣をつけ、更に重複部分の少い効果的な予測表を作ろうとする努力は、必ずしも重要なことではない。なぜならこれら重複部分にこそ、当然に処遇環境因子が介入しているわけであり、ここに今まで $B = \phi(P)$ の追究を重ねて来た本研究は、 $B = \phi(E)$ の追究へと発展して、どのような少年はどのように処遇すべきかの間に答えるに至らなければならないからである。林(13), 天野氏(3)らの研究は、事後要因をかなり追っているいみで、この目的に一步進んだものとみられるが、やはりそれは単なる予測の段階を出ず、Geueck(9)~(11)が行ったように $B = f(P, E)$ の分析にまで進んでこそ、実践科学としての犯罪心理学、矯正心理学の目的に添うものといわなければならないのである。

Ⅲ 非行の診断型と予後

前述して来たところは、すべて非行少年における断片的な姿から予後をみて来たものである。では非行少年を総合的にとらえた場合、それは予後をどのように予見するであろうか。非行現象を病気にたとえるなら、どのような病気がどの程度に進行している場合にどのような予後を示すであろうか。

犯罪・非行の診断型の設定、分類は、Lombrozo, Ferri 以来、Persons, Gruhle(12), Seelig(24), Aschaffenburg(4), Mezger(18)などによつて数多く試みられて来たが、これらの分類を総括して Exner(6) が、唯一の絶対的に正しい分類はありえないとし、異つた立場、目的に応じてそれぞれに異つた分類を設定していることは当をえたものといわねばなるまい。しかし少くとも治療という観点に立つならば、前述したように個々の犯罪、非行という症状をとらえて分類、診断することでは不充分であるし、また環境から離れた生物学的人格によつて分類することでも不充分である。人間行動の病態は、常に Lewin(16)の示したように、人格と環境との関係の病態としてとらえるべきであり、非行の背景をなす心的機制に、それも原因としての機制というより状態化した機制に目を

向けることが必要とされるのである。Alexander(2), Friedlander(7), Reckless(23)などの分類は、こうした心的機制にかなり着目したものとはいえようが、しかし最もその方向をよく表したものとしては、Healy と Bronner(14)の研究をあげるべきであろう。ここでは非行少年が、人格負因又は著しい葛藤をもつもの、環境条件の極悪なもの、両者とも軽微なもの、の3群に分たれ、それぞれ 19/77, 38/84, 72/91 の更生率が報告されているのである。しかし現実非行を診断する場合は、この三つのカテゴリーのみでは不充分である。そこで私は以下にのべるような基準に従つて非行の社会心理学的診断型を設定し follow-up 開始に先立つ診察場面において、200 例の個々の少年についての診断を下しておいたのでここにその診断結果と予後との関係を報告し、本研究を結ぶことにしたい。

診断、分類法： 心的機制に目を向けるに先立ち、特殊な環境条件をまたずに、人格それ自体が危険状態にあるものにも目を向ける必要がある。更にこの人格負因は軽度であつても以下にのべる危険な心的機制をより容易に発生させる要因として理解するべきである。そこで私はまず固定的(生物学的)人格負因を第一の要素とし、その上で心的機制の発生を考えるのである。

非行初期の心的機制として諸家によつて(時には一元的に)強調されているものは、**frustration** 又は **conflict** による不適応状態であり、これにまず注目することは妥当であろう。一般に個人的非行は、程度の差こそあれ Aichhorn(1) のいう Antisocial Character(体質に相当するもの)の上にこの種の危険状態が発生し、それが tolerance の限度をこえたときに発生する。そしてその非行症状のみを抑制すれば、それは他の非行症状を生んだり、或は Antisocial Character に比して Horney などのいう Neurotic Character が強い場合は神経症を生むものとみられるのである。しかしながら非行を単に不適応によつて一元的に理解することはできない。Sutherland(27), Lindsmith(17), Reckless(23)などによつて指摘されているように、個人的非行過程に対立するものとして社会的非行過程がある。私はこの社会的非行過程を、**不良感染**という機制でとらえることが妥当であると思う。我々の社会は多くの矛盾を含んでおり、我々の規準からみれば不良社会だとみられる大小様々の社会が、外部又は内部に存在している。この不良社会に適応している状態が不良感染状態である。我々は例えば博徒、的屋、ぐれん隊などの反社会組織所属者に、この不良感染の典型をみることができよう。ここでは反社会的な厳然とした規律が存在する。しかし私は広義の不良グループ

に属しているもの、従つて仲間のある非行者のすべてに、この不良感染の機制を認めることが妥当であると思う。なぜならそこにはすべて社会的交互作用がみられるのであるから。こうして私は初期心的機制の二大群として、**frustration, conflict** による不適応状態と、不良感染状態とを設定し、このほかに特殊な心的機制をその他の群として設定したのである。

最後に一度非行又は非行の基礎をなす基礎状態が発生すると、それは高次の発展をして行く。この発展の機制として第一にあげられるのは、人格負因に対応する**不良習性**である。次に感染状態に対応するものとして、**不良環境親和性**があげられる。これは本人の不良交友性、具体的な親近性、及び不良環境の側からの束縛に大別することができる。次に **frustration, conflict** による不適応状態に対応するものとして、種々の**悪循環**が現れる。このうち主なものは、不適応が劣等感を強め、その劣等感が一層不適応を強めるという個人的悪循環（神経症にもみられるもの）と、非行が社会的圧迫を招き、その反抗として非行が強まるという社会的悪循環とがあるが、最も重要なものは家庭内社会的悪循環、つまり非行が家族特に両親からの罰、虐待を生み、それが反抗を一層強めるという悪循環である。この場合多くは少年は不良集団に慰めを求め、そのため一層家庭葛藤を強めているので、これを仮に**環境性悪循環**と呼んでおきたい。次にその他の心的機制に対応するものは、特にとりあげる必要はなく、発展した場合は習性と悪循環によつて説明しよう。最後に非行が重なるにつれて**不良目的性**が確立されて行く。これと不良習性とは、意識的か無意識的かという程度の差であり、**Aschaffenburg**(4)なども積極的か消極的かという程度の差だとみなしているが、職業犯人などにみられるように、全生活が不良目的性によつて設計されるまでに至つた場合は、それは特殊な形態となるので、一応別に設けた方がよからう。

以上の諸因子機制の組合せによつて私の分類は成立するのであるが、ここに初期とか発展期とかいうことは、もちろん程度の問題にすぎない。従つて実際には、原因の機制をとり除くことによつてほぼ治療しうる段階にあるものを初期の型とし、発展の機制に対してより強く処置を加えなければならない程度にまで進んだものを発展型として扱うことが便利である。また人格負因が根底にあるかないかも程度の問題であり、従つて現実にある大凡の環境のもとでは必然的に危険状態に陥るような程度のもののみを人格負因型として分類することが便利であろう。以下にこの方法によつて非行（症状）を現す反社会的危険状態（病氣）の診断型を略述する。詳しくは別

著(20)を参照されたい。

I 人格負因型： 外因性、内因性精神病、高度の精神薄弱、高度の精神病質のために、ほとんどすべての環境下において発生する危険状態である。特に精神病質が重要であり、**Schneidler** (26) の分類によれば、意志欠除、情性欠除、爆発が最も多く、発揚、顯示、熱狂、気分易変がこれに次ぐ、**Aichhorn** のいう **Antisocial Character** はこれらの総合的なもので、**Ernst** もかかる綜合型を重視している。

II 特殊型： 他のすべてに含包されない初期の型で、例えば過失や強迫非行を生む無意識の葛藤などが含まれるが、更に慢性的危険状態でなく、**III, IV** の機制が一時的にごく偶然の組合せによつて強く生じ、そのために根本的病態なしに、**Exner** (6) のいう機会性犯罪の純粋なものが生ずる場合も、ここに含める。**Aschaffenburg** (4) のいう激情犯は、この機制と、**I** 又は **III** の機制の混合によつて生ずるとみられる。

III 不満型： **frustration, conflict** が、**tolerance** の限度をこえて、継続的に蓄積されている場合で、高次発展の余り認められないもの。

A) 純粋環境不満型：不満状態の責任が、ほとんど環境の異常に帰せられるもの。

B) 狭義の不満型は、環境及び人格の双方の責任によつて生じる。即ち、**B₁**) 家庭不満型：不満状態が家庭内人間関係に根ざしているもの、**B₂**) 劣等感型：身体障害などの特殊な劣等性に根ざしているもの、**B₃**) 特殊不満型：その他に根ざしたもの。

C) 我執性、顯示性不満型：顯示性を中心とするものがまが著しく、主としてそのために不満状態が発生している場合。

IV 感染型： 不良社会・集団に属し、継続的にそれに適応している状態のうち、高次発展の余り認められないもの。なお集団それ自体の不良性は軽微で、それが特殊な状況の組合せと集団効果によつて非行を生み出す場合（集団状況型）は特殊型として扱う。

A) 純粋環境性感染型：常識で考えて止むをえないとみられる程度の不良感染。

B) 追従性感染型：意志薄弱又は強迫的追従性に環境の働きかけが加わつた感染。

C) 積極的感染は自らの不良交友欲求によつて行われる。即ち、**C₁**) 不良交友型：潜在的非行性特に軽度の **Antisocial Character** によるもの、**C₂**) 不満感染型：感染の背後に不満状態のあるもの、**C₃**) 顯示性感染型：顯示性を基礎にした不満感染。

V 発展型： 発展機制が重要な位置を占めるもの。大

Table 6 診断型と予後

(() 内は女子数を示す)

	良	不良	その他
I 人格負因型	0	9(1)	1
II 特殊型	11	1	0
III A 純粹環境性不満型	2(1)	0	0
B ₁ 家庭不満型	4(1)	6	4(2)
B ₂ 劣等感型	1	2(1)	0
B ₃ 特殊不満型	1	1	0
C 我執性・顯示性不満型	2	1(1)	3(2)
IV A 純粹環境性感染型	6(1)	0	2(2)
B 追従性感染型	8(1)	3	1
C ₁ 不良交友型	8(1)	13	1(1)
C ₂ 不満感染型	7(1)	3	0
C ₃ 顯示性感染型	4(1)	3(3)	2(1)
V A 単純習性型	0	3	2(1)
B ₁ 環境習性型	0	12(2)	3
B ₂ 不良交友発達型	3	12	2
C ₂ 環境性悪循環型	4(1)	34(1)	0
D 職業型	0	9(2)	3(2)

註1 集団状況型7例はIIに、単純悪循環型1例はV Aに入れてある。

註2 機軸の併合しているものは、主な方に分類した。分類困難なもの3例。

註3 過日の日心報告では、Iのうちの精神病とIIをその他の型とし、III B₁のうち環境負因の大きなものをAに入れ、IV Aに集団状況型を含ませるなど、表の上に関する限り分類を違えてあるので念のため。

部分は人格も歪められている。

A) 単純習性型：不良習性のみによつて特徴づけられるもの。

B₁) 環境習性型：不良環境親和性と不良習性のみによつて特徴づけられるもの。放任されているものが多く、徒遊目的意識をもつ。

B₂) 不良交友発達型：環境習性型と環境性悪循環型との中間の型で、極端な発展をせずに一進一退をしているもの。

C₁) 単純悪循環型：悪循環と不良習性のみによつて特徴づけられるもの

C₂) 環境性悪循環型：上記が不良環境に結びついて

いる場合。

D) 職業型：全生活が不良目的によつて設計されている場合。高度に習性化した徒遊性売春を含む。

さて、本 follow-up の前に決定した以上の診断型と予

後との関係、つまりどういう病態のものはどうなりやすいかということを調べた結果、Table 6 をえたのである。これは前節までにのべた諸結果を裏書きするものであるといえよう。特にこの Table からの結論としては、1) 人格の負因の度の強いもの(I, V)は治りにくく、環境の異常のみで非行に陥つたもの(II, III A, IV A)は治りやすいこと、2) 発展すればするほど治りにくいこと、3) 不満型全体と感染型全体に黒白はつけられないこと、4) 我執性、顯示性のもの(III C, IV C₂)は、女子の方が治りにくいこと(女子は売春などで顯示と愛情欲求をかなり満足できるのに対し、男子の顯示性は主として社会的な仕事などを通じてでないと満足させられないためであろう。因みに女子の感染型はほとんどが売春として現れている)などである。しかしながらこの Table のいみは、更に今後処遇環境の分析をしてそれと関係づけてこそ、充分に生かされるものといわねばならないのである。(22) (1956年3月22日受稿)

文 献

- (1) Aichhorn, A. : Verwahrloste Jugend. (三沢訳, 日本教文社)
- (2) Alexander, F., Staub, H. : The criminal, the judge and the public.
- (3) 天野牧夫 : 再犯予測におけるカテゴリー数量化の比較, 教心研 III 3
- (4) Aschaffenburg, G. : Das Verbrechen und sein Bekämpfung. (高橋訳)
- (5) Burgess, E. W. : Predicting success or failure upon release from state institutions. J. Juv. Res. 1932 (間接引用)
- (6) Exner, F. : Kriminologie.
- (7) Friedlander, K. : Psychoanalytical approach to juvenile delinquency. (懸田訳, みすず書房)
- (8) Glueck, S. E. : Unraveling juvenile delinquency. (中央青少年問題審議会訳, 大蔵省印刷局)
- (9) " 500 criminal careers.
- (10) " Criminal careers in retrospect.
- (11) " After conduct of discharged offenders.
- (12) Gruhle, H. W. : Verbrecher. (間接引用)
- (13) 林知己夫, 西村克彦 : 累犯の研究, 東大出版
- (14) Healy, W., Bronner, A. : New lights on delinquency and its treatment.
- (15) 樋口幸吉 : 戦後における青少年犯罪の精神医学的研究, 法務資料

- (16) Lewin, K. : Dynamic theory of personality.
- (17) Lindsmith, A. R., Dunham, H. W. : Some principles of criminal typology. Soc. Forces., 1941
- (18) Mezger, E. : Kriminalpolitik auf kriminologischer Grundlage. (吉益訳, 朝倉書店)
- (19) 水島恵一：非行少年の社会的予後に関する研究 (I), (II) 教心研Ⅱ 4, Ⅲ 2
- (20) ♪ 社会病, 白亜書房
- (21) ♪ 歪められた女性, 「女性心理学講座Ⅰ」 福村書店
- (22) ♪ 非行少年の処遇(治療)に関する研究, 刑政, 昭 31—11
- (23) Reckless, W. C. : The criminal problem.
- (24) Seelig, E., Weindler, K. : Die Typen der Kriminellen, 1949
- (25) Schiedt, : Ein Betrag zum Problem der Rückfallsprognose. (間接引用)
- (26) Schneider, K. : Die Psychopathischen Persönlichkeiten. (懸田・鱒崎訳, みすず書房)
- (27) Sutherland, E. H. : Principles of criminology (東大刑法研究室訳, 朝倉書店)
- (28) Tappan, P. W. : Juvenile delinquency.
- (29) 吉益脩夫：犯罪心理学, 東洋書館
- (30) ♪ 犯罪者の成行の予見, 刑法雑誌 1
- (31) ♪ 判決時における初犯者の社会的予後, 民族衛生16の1

subjects (pupils ranging from the fifth graders of the elementary school to the third graders of the lower secondary school) were used.

The tester carefully observed the results of each calculation in each column and drew out of the general result the following eight factors which, he considers, will be a helpful indication of the character of the subjects. With this key in hand, the writer tried to measure their character.

3. The results.

The eight factors drawn from experiment are as follows :

- (1) The total number of the additions made by each subject .
- (2) The fluctuation of quantity of the additions.
- (3) The position of the highest climb.
- (4) The rate of climb.
- (5) The total of miscalculations.
- (6) The total of correction of errors.
- (7) The fastness and slowness of the rising curve.

- (8) The general efficiency curve of the mental work.

The writer considers that an individual's character is formed by the variance of the combination of these factors, which will give the following six distinct types of character.

The tester's observation, the evaluation of the character of the subjects made by their teachers in charge and the personal criticism recorded in the school register joined forces with the results of the experiment to give the six patterns of character, in accordance with which the writer has made a plan of character diagnosis.

- (1) Steady type
- (2) Competitive type
- (3) Positive fluctuation type
- (4) Feeble type
- (5) Negative fluctuation type
- (6) Stagnant type

A STUDY ON THE PROGNoses OF SOCIAL ADJUSTMENT OF THE DELINQUENT JUVENILES —CONCLUSION—

By Mizushima, Keiichi

Tokyo Child Guidance Clinics

I, II

Following up 200 delinquents for more than a year, several factors which had been measured before were found to predict prognoses as shown in the previous reports. All of those factors are shown again on the left side of Table 1. Of course, they were regarded as indicating personality traits. However, because they were related to one another, the relations were studied more closely. Thus 11 factors were finally obtained as predicting prognoses which are shown on the right side of Table 1. These factors, by themselves, can predict prognoses. Among them, the first seven factors are the ones

which can be measured through objective examination. and from these factors, a prediction table (Table 5) was obtained by the method as shown in Table 4. Table 5 is similar to one of the various prediction tables reported by Glueck and many others. The next two are the diagnostic factors obtained by understanding the behavior traits, and from these factors another prediction table (Table 3) was obtained. The last two, on the other hand, are not the representative factors, because other main psychological tests (TAT, Rorschach, etc) have not been made, and we do not consider these factors significant enough.

III

If we consider the delinquent condition as a disease, it is necessary to study not only the relations between symptoms or personality background and prognosis, but also the relations between the disease itself and prognosis. Then, what is the disease itself? Many typological diagnoses have been studied with regard to crime or delinquency. However, from the therapeutic point of view, it is suitable to classify them, as Healy reported, according to the dynamic situation or socio-psychological mechanism, in which personality and environment are concerned, and from which delinquencies result. Accordingly, the socio-psychological diagnostic classification of delinquent conditions has been made as follows:

Those which belong to Group I are the crises caused by personality defects such as exogenous or endogenous psychosis, serious cases of feeble-mindedness and psychopath. These defects are regarded as producing delinquencies under no environmental abnormalities. Group II refers to all types which are not contained in I, III, IV and V. For instance, the neurotic crisis caused by unconscious conflict belongs to this group. Furthermore, the acute crisis which results in the pure "occasional crime" is in this group. Group III is characterized by chronic frustrations or conflicts. There are three subgroups A, B and C. A refers to the crises mainly caused by the environmental abnormalities. B is concerned with crises caused by both environmental and personal abnormalities — B₁

by family conflicts, B₂ by special inferiorities such as deformity, and B₃ by others. C refers to crisis caused mainly by the selfishness of the individual. Group IV is characterized by chronic "bad associations" (especially with gangs) which Lindsmith and Dunham recognized as the social pole of the delinquent conditions. There are again three subgroups A, B and C. A is caused by seriously antisocial environmental forces. B is caused by both environmental forces and personal weakness. C is characterized by voluntary "bad associations." Of these, C₂ and C₃ have the crises belonging to Group III. C₃ is caused by individual's selfishness. Group V is characterized by individual's antisociality of higher order which results in the "conditioned crimes". There are four subgroups A, B, C and D. A refers to the simple habit of delinquency, B to the initiation with antisocial groups, and C to the vicious circle caused by the increase of punishment (especially from parents). Most of the delinquents of this circle are also in association with gangs. D refers to the antisocial intention which results in professional crimes.

Before the 200 delinquents were followed up, each of them was diagnosed according to the criteria described above. It has now been found that there are several significant relations between the diagnostics and prognosis as shown in Table 6. It would be more important to study these results in relation to the conditions of after-care. This will be reported shortly.

ON THE TESTING EFFECTS

By Hashimoto, Juji

Yokohama National University

This study is concerned with the functions of testing in teaching. The word "Testing Effect" as used here, means the effects with which the learning products are directly influenced by testing itself.

It has been pointed out by such experts as W. Brown, G. Raffel, R. S. Sackett, N. G. Hanawalt and K. B. Clark that, in the experiment of memory retention, a subject group that has once experienced